

# 宇都宮の民俗



宇都宮市教育委員会

表紙写真

飯山の獅子舞

(宇都宮市指定無形文化財)

# 序

# 文

宇都宮市は、今日、県都として、さらには北関東を代表する大都市として発展を続けています。

しかし、このような都市化の進展は、市街地は言うに及ばず市の周辺でも旧来から引継がれてきた伝統的な生活様式、風俗習慣等を消失させつつあります。

そこで、本教育委員会では、これらを記録として残す必要から、本格的に民俗資料の調査に取り組み、昨年度は「古民家調査」を実施し、今年度は「伝統的手仕事調査」を、来年度以降は「祭礼調査」・「民俗芸能調査」等を実施する予定であります。

今回、発刊いたすことになりましたこの「宇都宮の民俗」は、人々の記憶から忘れ去られようとしているこれらの民俗資料について概観したものであって、前述の調査結果の集録等と相まって、宇都宮の民俗資料の集大成の一部をなすものであります。

調査・編集にあたりましては、県立郷土資料館長の尾島利雄氏、同館指導主事の柏村祐司氏、並びに宇都宮郷土研究会の皆さまに貴重な御指導と御協力をいただきました。

厚くお礼申し上げます。

本冊子は、不備な点が多々ありますが、一応、宇都宮の民俗のあらましはつかめると思いますので、市民の皆さまの手引きとして、あるいは、研究のための基礎資料等として広く活用されれば幸いです。

昭和53年7月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤 一雄



## 目

## 次

序	宇都宮市教育委員会教育長	後藤 一 雄
監修者のことば	栃木県立郷土資料館長	尾 島 利 雄
まえがき		4
1、総 観		5
2、住 居		9
3、食 事		14
4、衣 類		19
5、生 産		22
6、運搬・交易		29
7、社会生活		33
8、信 仰		38
9、人の一生		45
10、祭りと年中行事		49
11、民俗芸能		58
12、歌 謡		62
参考文献・注		71
あとがき		74

## 文化財愛護シンボルマークについて



このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗供のイメージを表わし、これを3つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

## 監修者のことば

### 「民俗」ということ

栃木県立郷土資料館長 尾 島 利 雄

近年、民俗文化財への関心がとみに高まり、マスコミなどでも、連日「民俗」ということばがとりあげられている。

ところが、いざ「民俗」とは何かというと、答えられない人がかなりいるようである。「民俗」とは典型的なもので、集団によって支えられくり返しくり返し行なわれてきたことがらをさすことばであり、民俗学とは、長い間伝承されてきた民俗資料（例えば風俗習慣）を広くしかも数多く採集し、それを比較研究整理して、一国の文化、特に基層文化（庶民の生活文化）を究明する学問とされている。

従って日本民俗学とは、簡単にいえば、名もなく貧しく美しく生きた日本の庶民の生活文化を調べる学問なのである。

こう考えてくると民俗資料とは庶民の生活文化を支えてきた資料であり、この庶民の生活文化財ともいうべき有形無形の資料は、かつての日本の基層文化を形成していた庶民層の生活文化を究明するために欠くことのできないものであると同時に、現代社会の成立を知る上でも重要な手がかりとなるものということになる。

さらにつけ加えるならば、今に残された古き民俗伝承の中には、私たちの未来を考える上で参考になることもかなりの数存在する。

一昔前は、一部に「愚民のタワゴトを聞いてそれを歴史なりとするなど笑止千万」などという声もあったが、今は、そんなことをいう人はほとんど影をひそめてしまい、民俗調査の重要なことが、一般人にまで広く浸透しつつある。

今回宇都宮市教育委員会から市内の民俗をまとめた報告書を出したいので、監修の労をとってほしいとの要請があった時、これをひきうけたのは、この仕事が、栃木県の文化財の保存と伝承に役だつとともに、宇都宮市民はもとより一般県民のふるさと理解にひえきするところ大なるものがあると信じたからである。

この民俗の小冊子が、各方面で活用されんことを祈りペンをおく。

# まえがき

本冊子は、栃木県が昭和52年度実施の「緊急民俗文化財分布調査」の際その調査対象地となった、宇都宮市の新市域9地区（野高谷、屋板、東木代、下川俣、西田中、坂本、大網、下欠下、羽牛田）と独自に調査した2地区（鶉内、中篠井）の調査結果と、市教育委員会が数年来調査を行なった民俗関係の資料及び県立郷土資料館、下野民俗研究会等が刊行している民俗関係の研究物の成果を含めてまとめたものです。

52年度行なった11地区（調査地区の概要は、本文の「1、総観(4)」に記した）のうち清原地区の野高谷町と瑞穂野地区の東木代町の調査は、宇都宮大学民俗研究会があたりまして、他の9地区は、編集も担当した下記の宇都宮郷土研究会員5名の各位が調査しました。

本冊子を編集するにあたりましては、監修を県立郷土資料館長の尾島利雄氏をお願いすると共に同館職員御助言を受け、市教育委員会社会教育課長以下、次の者が編集に関する仕事にあたりました。

なお、各項ごとに記しました解説は、県立郷土資料館指導主事の柏村祐司氏に執筆をお願いしたものです。

## ●監 修

尾 島 利 雄（栃木県立郷土資料館長・宇都宮大学講師・同大学民俗研究会顧問）

## ●解説執筆

柏 村 祐 司（栃木県立郷土資料館指導主事）

## ●編 集

◎半 田 昭（宇都宮市教育委員会社会教育課長）

横 山 和 夫（宇都宮市立宮の原中学校教諭・宇都宮郷土研究会員）

阿久津 義 正（ " " " " ）

真 壁 敏 夫（ " 姿川中学校教諭・ " ）

谷 島 利 康（ " 雀宮中学校教諭・ " ）

河 越 昌 司（宇都宮市教育委員会社会教育課文化振興係長）

○定 岡 明 義（ " 文化振興係主任主事・宇都宮郷土研究会員）

桜 井 敬 朔（ " " ）

松 沢 清一郎（ " 文化振興係主事）

〔◎編集責任者、○編集主任〕

# 1、総 観

(市界日十百計標準) 市界の法人(市)

## (1) 地 理

宇都宮市は、栃木県のほぼ中央、東京から北100キロメートル余りに位置し、北に那須・高原、北西に日光、南東に筑波の各連峰をのぞみ、更に、東に鬼怒の清流がみられ、関東平野の広大な沃野がひらけ、美しい自然環境に囲まれている。

市の中心部は海拔117・1m(市役所所在地)、戸祭山、八幡山の連丘が南北にのびて、上町・下町の境をなし、市街地を形成し、西北は大谷・古賀志・鞍掛の丘陵が起伏している。しかも、この付近は、絶好の市民ハイキングコースとして整備されているほか、市民の憩の森林公園の造成も進められている。

市中を流れる河川は、東に鬼怒川、中心部に田川、西に姿川の3河川が貫流し、各河川の流域には水田地帯が広がり、本市農業の基盤を形成している。

気候は内陸性で寒暖の差の激しい地域に属し、暴風雨等の自然災害は比較的少ないが、雷は北関東の名物といわれるほどである。

## (2) 歴 史

宇都宮の歴史が明らかになるのは奈良時代からであり、上古の様子は定かではない。奈良時代にはいと東北経営の拠点となり、更に二荒山神社の門前町として栄えただけでなく、奥州に通ずる街道沿いの宿駅として発展してきた。

その後、平安時代以後宇都宮氏が22代にわたって当地方を支配し、宇都宮城が築かれてからは、その城下町として繁栄を続けてきた。江戸時代になると日光東照宮が建立され奥州・日光両街道の分岐点として益々その重要さを加えるに至った。

明治維新の戊辰戦争と第2次世界大戦の2回にわたって宇都宮の市街地は戦禍にあったが、今日、県都としてばかりでなく北関東の代表的都市に成長しつつある。

現在の市域は、市街地となっている旧市内と昭和29年に宇都宮市に合併された周辺の11ヵ村からなっており、この11ヵ村のほとんどは現在新市内と呼ばれ、急激な都市化が進んでいるが、一応、農村の形態をとどめている。

### (3) 人口の推移 (各年10月1日現在)

注-①

地区別	大正9年	大正14年	昭和10年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和50年
総数	123,789	140,973	156,265	210,046	227,153	265,696	344,420
旧市内	63,711	76,138	87,129	97,075	127,169	162,559	186,437
清原	6,060	6,129	6,528	9,750	9,842	9,055	11,701
平石	6,364	6,784	7,462	10,263	10,115	14,084	23,454
横川	4,964	5,026	5,450	11,815	7,092	10,964	15,496
瑞穂野	4,972	4,798	4,923	6,505	5,735	4,978	5,458
豊郷	5,153	5,524	6,688	9,501	6,966	7,758	16,521
国本	6,736	7,614	8,448	11,318	5,124	4,949	6,869
城山	9,843	11,436	11,719	13,201	13,630	13,757	17,352
富屋	3,022	3,091	3,052	3,818	3,566	3,291	5,242
篠井	※2,620	※2,663	※2,886	※3,621	3,516	3,128	3,152
姿川	6,063	7,363	7,034	13,131	9,085	14,249	28,812
雀宮	4,221	4,407	4,946	11,048	15,313	16,944	23,953

※は分村合併のため、昭和25年の割合によって算出。

### (4) 調査地区の概要

※ここで扱う調査地区とは、昭和52年度に民俗調査を実施した宇都宮市の11新市域の中からそれぞれ1カ所抽出したものである。

#### ① 位置



番号	地区
①	野高谷
②	鶺鴒内
③	屋板
④	東木代
⑤	下川俣
⑥	西田中
⑦	坂本
⑧	大網
⑨	中篠井
⑩	下欠下
⑪	羽牛田



②概 観

番号	地区	概 観
①	野高谷 (清原)	宇都宮の東端、鬼怒川東岸の台地上に位置し芳賀町に境を接しており、集落は柳田街道の北側に南北に並んでいる。
②	鶉内 (平石)	旧平石村の北端に位置し、耕地のほとんどが、水田であり、西側の台地上に広がる工業団地と対象的な景観である。
③	屋板 (横川)	旧横川村の行政の中心地で、今日も市役所の出張所、郵便局、学校等が集中しており、新興住宅地化が進んでいる。
④	東木代 (瑞穂野)	鬼怒川西側の川岸に開けた水田地帯に位置し、開発は進んでおらず比較的純農村の姿を今日も止めている。
⑤	下川俣 (豊郷)	羽黒街道と白沢街道に挟まれており、西部の本田と東部の新田の集落に分かれ耕地はほとんど水田になっている。
⑥	西田中 (国本)	鞍掛山の南東に位置し、山ふところ深いところに集落が分布している。
⑦	坂本 (城山)	大谷の入口で、大谷石の採石場がみられ、集落の半数以上の家は大谷石に関係ある職業についている。
⑧	大網 (富屋)	高館山ろくの南北に集落が位置し、集落東側に広がる水田のまん中を田川が流がれている。
⑨	中篠井 (篠井)	集落の位置は、三方山に囲まれた盆地状で、西側の一段低いところには水田が広がっている。
⑩	下欠下 (姿川)	宇都宮市の西部を南北に流れる姿川の東部に位置し、集落の周囲は水田がよく開けている。
⑪	羽牛田 (雀宮)	国鉄雀宮駅の東側に位置し、集落の周囲には、整然とした水田が広がっている。



⑤地形図

①野高谷



②鶺内



③屋板



④東木代



⑤下川俣



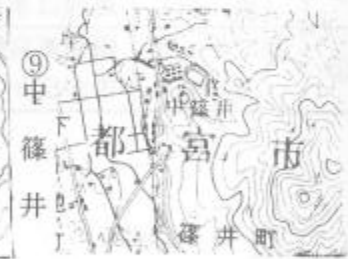
⑥西田中



⑦坂本



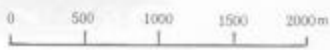
⑧大網



⑩下欠下

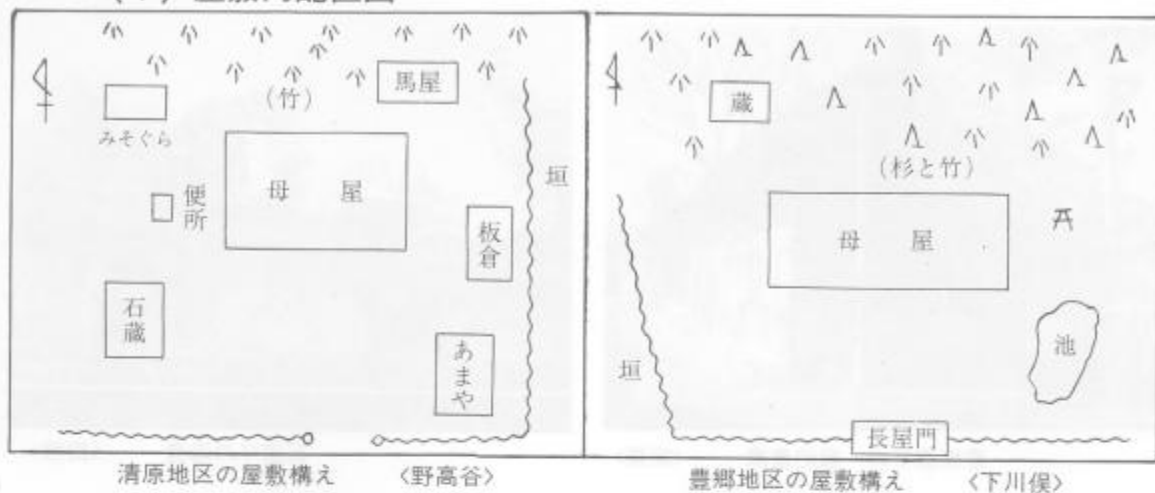


⑪羽牛田

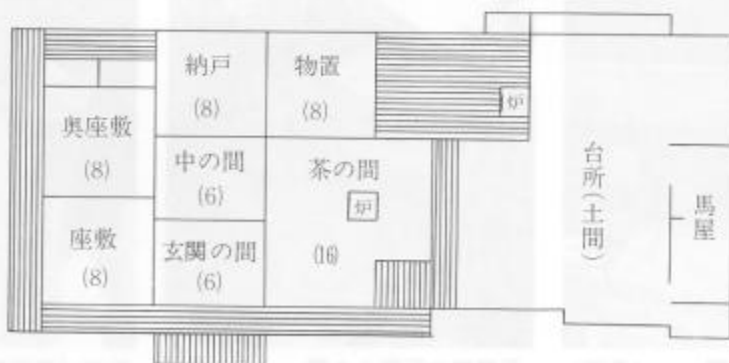


## 2、住 居

### (1) 屋敷内配置図



### (2) 間取図



### (3) 母屋



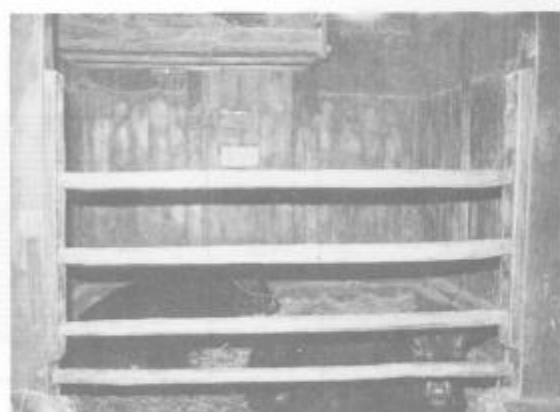
寄棟造りの一般的農家 <新里>



石造りの母屋 <西根>



いろり <岩曾>



小牛の飼育に利用している旧馬屋 <岩曾>

### (4) 付属屋

注-②



豪農の長屋門 <長岡>



石屋根の石蔵と土蔵 <岩曾>



氏神(篠井神祠) <中篠井>

